

連載

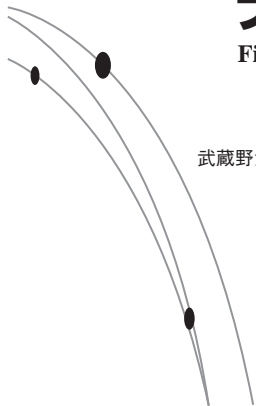
## フィールド・アイ

Field Eye

バルセロナから——③

武蔵野大学教授 石原 真三子

Mamiko Ishihara



### シエスタの国の労働時間

スペインに来る外国人旅行者が困るのは、食事の時間だと思う。ほとんどのレストランの昼の開店時間は午後1時半か2時で、ランチタイムが終わると4時すぎに閉店する。さらに夕食を食べたいと思ったら、午後9時まで待たなければならない。お腹がすいて我慢できない旅行者は、常時開いているバル（居酒屋兼定食屋兼カフェ）でタパス（小皿料理）をつまんでお茶を濁すことになる。

バルセロナに来たばかりの頃、午後9時すぎに自宅の近くのレストランにはいったら客は私達だけということがあった。料理は結構おいしいのに、はやっていないのだろうかと思っていたら、9時半をまわった頃から客が入り始め、10時すぎにはかなり広い店内がほぼ満席になり、大賑わいになった（しかも、幼児をつれた家族が何組かいた！）。

平均的なスペイン人の夕食の時間は午後10時で、レストランは、12時頃まで開いている。こんなに夕食の時間が遅いのに、会社や学校は日本と同じように朝9時に始まるので、スペイン人はみんな睡眠不足になっているのではないかと思ったが、そうでもないらしい。バルセロナ大学で経済学を教えている友人のアンジェラの家族は、午後10時頃に夕食を食べ、テレビを観つつうたた寝をし、12時前には就寝する。つまり、お腹がいっぱいになって眠くなったそのまま寝てしまうということだ。私が幼い頃、「ごはんを食べてすぐ寝ると牛になるよ」と母に言われたものだが、スペイン人は牛のような強靱な胃袋をもっているらしい。

アンジェラや他の友人たちが「チョコレートに行こう」

と誘ってくれたことがある。待ち合わせは午後7時で、日本だったら夕食の時間だよなと思いつつ、甘いチョコレートを楽しんだ。山盛りのクリームを入れたチョコレートを飲んでいるアンジェラに、今日の夕食はどうするのか聞いたところ、「私はダイエット中だから夕食は無しだが、息子のために夕食をつくる」という返事が返ってきた。一緒にいた20代のヌリアは、「きっと10時頃にお腹がすくから、軽く食べると思う」と答えてくれた。「スペイン人は一日に5回食事をする」という。朝、昼、夕食のほかに、午前11時頃と午後7時頃にコーヒーやチョコレートを飲み、パン菓子をつまんだりするからだ。従業員の午前11時のお茶代を会社が負担する習慣もあるらしい。

スペインといえばシエスタ（昼寝）だが、最近、実際に昼寝をしている人はそんなにいないようだ。一方、昼食を重く食べる習慣は残っているので、昼休みは2時間必要らしい。昼の定食をだす店は、どこも2時から4時頃まで混んでいる。しかし、これも、企業によっては、他の国と同じように、勤務時間は9時から5時までで昼休みは1時間というスタイルをとるところもあるようで、昼食を簡単にすすす人も増えているらしい。バルセロナでも、一日中開いているサンドイッチの店が大規模にチェーン展開している。公立学校で日本語の先生をしているルルデスは、クラスが午後1時から始まる日には、昼食にサンドイッチを食べるしかないと言っていた。

スペイン人は休んでばかりでありあまり仕事をしないというイメージがあるが、バルセロナで生活してみると、スペイン人（カタルーニャ人かもしれない）は勤勉であるという印象を受ける。たしかに昼休みは2時間とるのだが、その代わり夜8時頃まで働いている。エル・コレテ・イングレスなどは、昼休みもなく午後10時まで営業している。2007年のスペインのフルタイム労働者の週当たり労働時間は42時間で、わずかにEU平均値を上回っている<sup>1)</sup>。

では何故スペイン人はあまり働かないというイメージがあるのだろうか。その理由は、観光客の多くがスペインへ来るのが夏だからではないかと思う。

スペインは、7月から9月まで夏休みの時期である。この時期に、多く的人是長期の休みを取る。スペインの有給休暇は1カ月（30日）で、夏に集中して30日取る人もいるし、夏15日、冬15日というように分散して取る人もいる。大家のアグネスはワイン会社勤務

でいつも忙しそうなのだが、去年の夏は2週間ほど中国・チベットを旅行し、冬はカナリア諸島で1週間過ごしていた。また、夏に街から人がいなくなるため、自分も1カ月休んでしまう店も結構ある。スペインのガイドブックを見ると、休業日の欄に「日曜と8月」と書いてある店がいくつもある。さらに6月頃から、仕事によっては「夏の営業時間」になるところもある。大学の秘書室は、午後2時までで終わってしまうし、7時頃まで開いていたはずの郵便局も早い時間に閉まってしまう。休みを取る人が多いので、交替の人数が少なくなっているためではないかと思う。利用する方も人数が減っているため、問題はないらしい。

日本で1カ月の休暇という、「日本では無理」という感想が返ってくるが、実はスペインの「1カ月」は休日も含んでいるので、日本でも数年勤務すれば法律的には取得できる有給休暇日数なのだ。有給休暇を20日まとめてとれば、ほぼ1カ月の休暇になる。違いは、取得するかどうかだ。EU諸国で比較すると、スペインの平均有給休暇取得日数はフランスやドイツに比べて少ないらしい<sup>2)</sup>。

バルセロナでバスに乗ると、バス停に着いて扉が開くのと同時に、バス全体が歩道側に少し傾くを感じる。バルセロナを走っているバスは、ほとんどが乗降口に階段がないタイプで、さらにバス停でバスが歩道側に傾くので、ベビーカーでも車椅子でも乗り降りが楽にできる。しかも、バスには、ベビーカーが2つ収まるくらいの専用スペースがある（スペインのベビーカーは日本でみかけるものよりもかなり大きい）。そのせいか、必ずといっていいほどベビーカーを押す母親と乗り合わせた。バスだけでなく、地下鉄でも街を歩いていても、東京よりも幼い子供やベビーカーの赤ん坊をよくみかける。また、数ブロックごとにある広場では、たくさんの子供達がサッカーボールと一緒に

走り回っている<sup>3)</sup>。しかし、スペインの出生率は日本と比べて高くないのだ。

スペインの合計特殊出生率は、1970年代には現在のEU諸国のなかで比較的高い水準にあったのだが、急激に低下し、1990年代後半に1.16~1.17と、EU諸国のなかでも最低水準になった。2000年以降はわずかに上昇し、2006年には1.38にまで回復した。すなわち、1990年代は日本の水準より低く、最近になって、現在の日本と同じ水準にまで回復したということだ。スペインでは、フランコの時代に子供を多く持つことが奨励されたため、出生率が低下しても、長らく、出生率を上昇させるための政策に拒否反応があったそう。しかし現在は、有給の産休を女性だけでなく男性も取得できるなど、制度が整備されつつある。しかし、安い公立幼稚園は定員が少なく、高いお金を払って私立の幼稚園やベビーシッターに預けなければならないなど、日本と同じような状況もあるらしい。

同じような状況でも、街で子供をたくさんみかけるほうが生活が楽しいし、出生率を上昇させる効果がありそうな気がする。スペイン人の生活をみていると、小さい子供と一緒に自由に外出できない、近所に子供が遊ぶ場所がない、有給休暇があるのに取得できない日本は、どこかおかしいと感じる。

- 1) 統計はEurostat (epp.eurostat.ec.europa.eu) を参照した。
- 2) Spainnews.com (www.spainnews.com) による。正確な統計は見つけられなかった。
- 3) ヨーロッパの街によくある広場は、聖人や偉人の名前が付いていたりするのだが、自宅の近所の広場の名前はなぜか、ジョン・レノン広場だった。

いしはら・まみこ 武蔵野大学政治経済学部教授。最近の主な論文に“Why Part-time Workers Do Not Accept a Wage Gap with Regular Workers,” *Japan Labor Review* Vol. 2, No. 2 (共著, 2005年) など。労働経済学専攻。